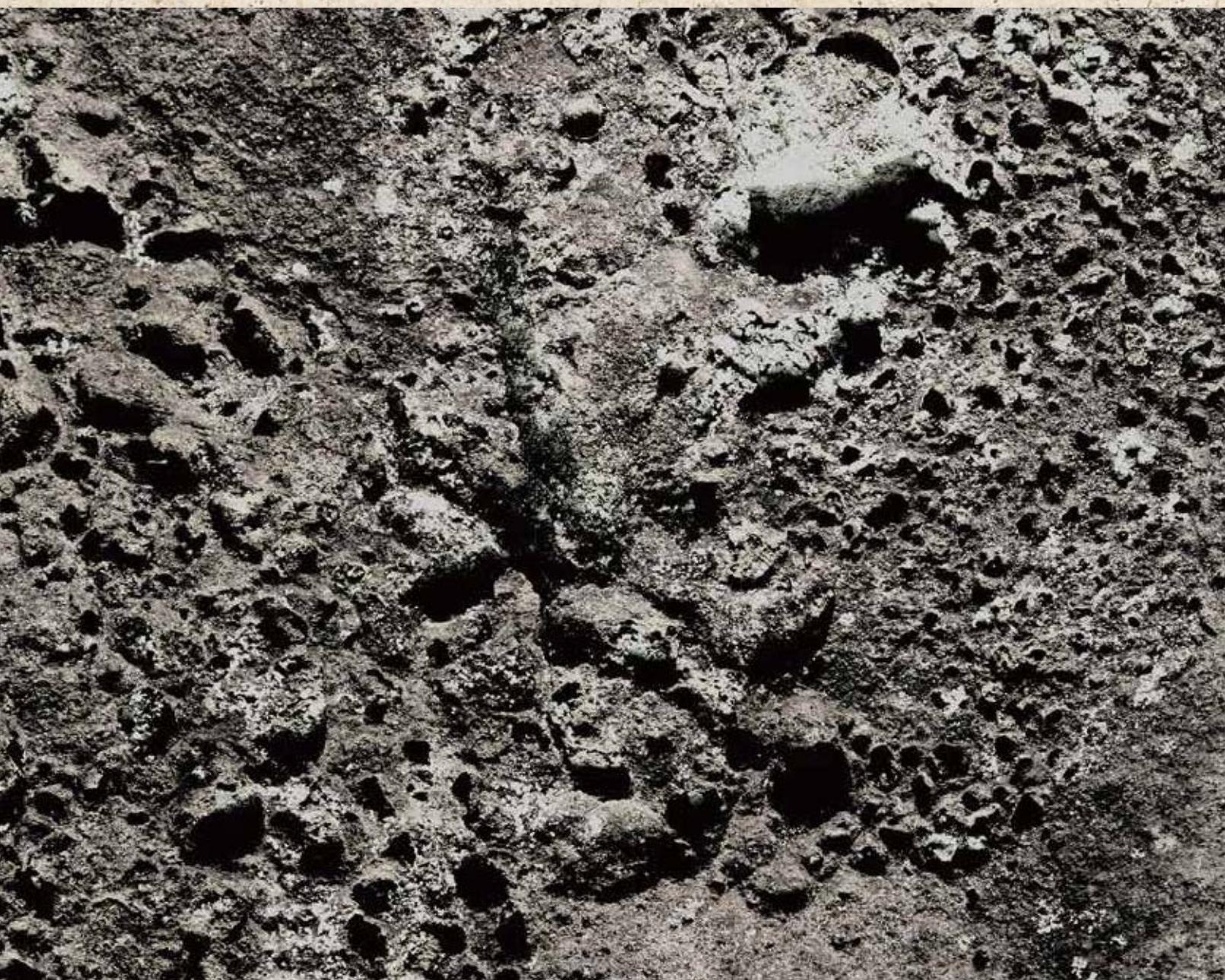


あわら市 たら製鉄遺跡の案内



たら製鉄遺跡保存会

もくじ

はじめに	1
あわら市細呂木地区と周辺のたたら製鉄遺跡	2
あわら市内の主なたたら製鉄遺跡の紹介	
細呂木遺跡1号地点(あわら市指中古ヶ巣)	4
細呂木遺跡2号地点(あわら市滝鴻ノ巣)	7
向山遺跡(あわら市笹岡向山)	8
細呂木窯跡(細呂木小学校移転用地)	9
その他のたたら製鉄遺跡	10
たたら製鉄の操業	14
編集後記	16

はじめに

昭和40年代、あわら市細呂木地区で実施されたフィールド調査により10ヵ所の製鉄遺跡が確認されました。その中で、現在遺跡の形態が確認できるのは「細呂木遺跡1号地点」のみになっています。私たちは、この遺跡を街づくりの観点から保存し、地域の遺産として後世に伝えるべきだと判断し活動を開始しました。

平成29年4月、有志による第1回目の会合を皮切りに、遺跡の保存と街づくりへの活用について、毎月のように協議を重ねました。

平成29年11月には方向性が固まり、遺跡の保存や整備に携わる団体を正式に発足させることとなりました。

日本で古来より行われていた製鉄法では、燃焼温度を上げるために「ふいご」を使用して炉内に空気を送り込んでいました。この「ふいご」が「たたら」と呼ばれたことから、日本古来の製鉄法が「たたら製鉄」となったと言われています。このことにちなみ、保存会の団体名を「たたら製鉄遺跡保存会」とさせていただきました。

平成30年1月には、市指定の文化財（史跡）に指定され、市の助成を受け保存工事を実施することができました。また、並行してボランティアによる遺跡手前広場の整備も進み、令和元年10月には遺跡ミニパークとしてオープンすることができました。

本書はこれを記念して、郷土の細呂木地区で盛んに行われていた製鉄産業と、細呂木地区近郊でこれまでに確認された製鉄遺跡を広く知っていただくために制作しました。

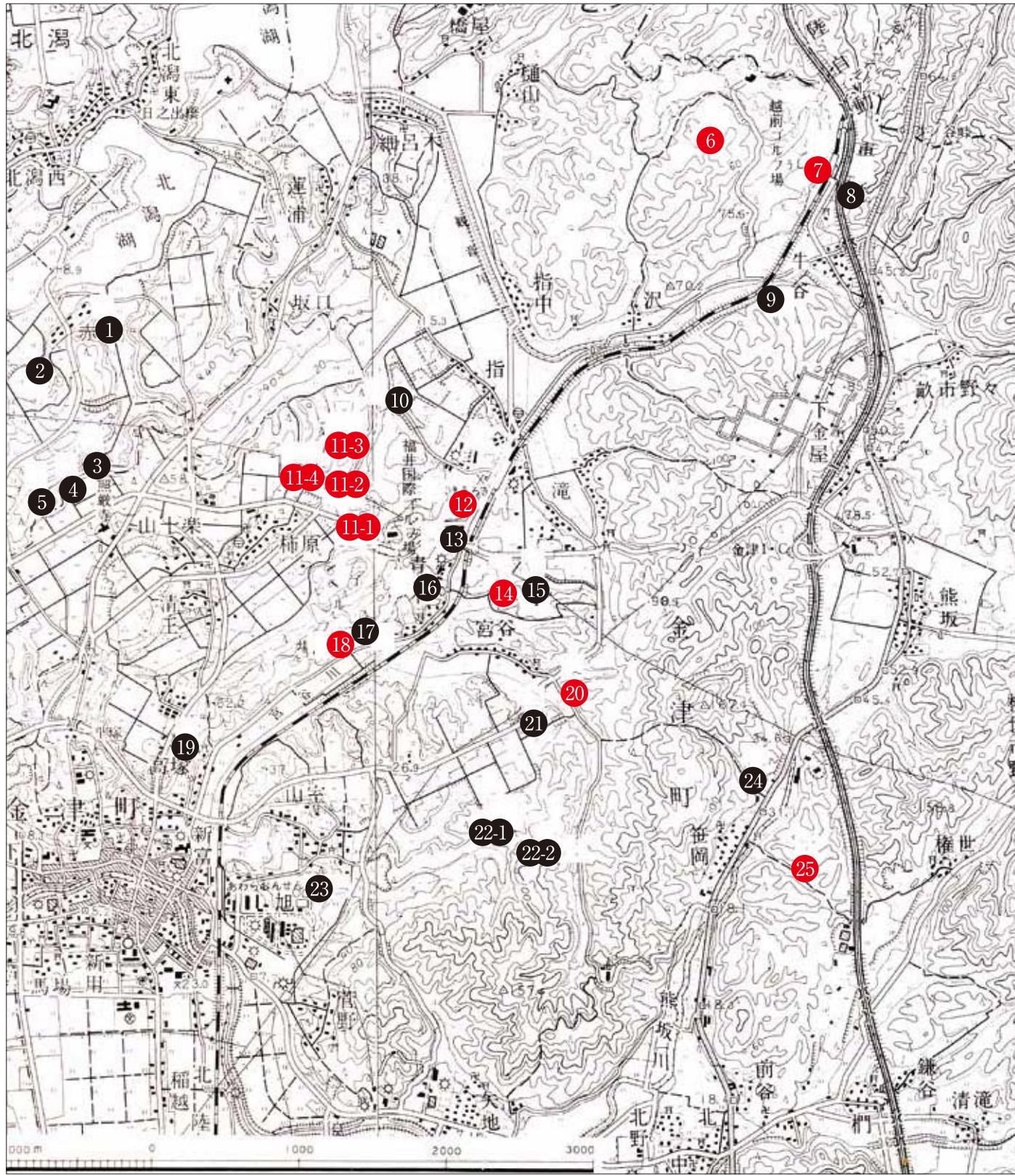
細呂木地区とその周辺には、まだ確認されていない未知の遺跡が埋もれているかも知れません。

本書がきっかけとなり、細呂木地区での製鉄産業に一層の興味を持ていただき、まだ見ぬ遺跡の発見にもつながっていけば幸いです。

たたら製鉄遺跡保存会
会長 藤川 龍七

細呂木地区を中心に広がる遺跡群は、ここに栄えた 製鉄産業の歴史とロマンを感じさせてくれる。

あわら市細呂木地区と周辺のたたら製鉄遺跡



印は本冊子で詳細を記載している製鉄遺跡です。また、遺跡箇所は平成13(2001)年当時のものです。

番号	所在地	福井県遺跡地図	加越たら研究会	福井県考古学研究会	備 考
1	芦原町赤尾	09036 赤尾遺跡	1 赤尾		
2	芦原町北潟	09055 北潟田浦遺跡	4 北潟田浦		
3	芦原町赤尾	09043 赤尾三ノ輪遺跡	2 赤尾三ノ輪		
4	金津町山十樂	09044 赤尾上龜ノ尾遺跡	5 山十樂横峰		横峯遺跡(工藤)、0944に近接
5	芦原町赤尾	09045 赤尾碓鉢谷遺跡	3 赤尾碓鉢谷		蛙ヶ平遺跡(工藤)
6	金津町沢	10023 沢遺跡	12 沢松ノ木谷	9 沢遺跡	「鉱滓出土地」(福考)、地点不明
7	金津町牛ノ谷	10024 牛ノ谷遺跡		10 牛ノ谷遺跡	「鉱滓出土地」(福考)
8	金津町牛ノ谷		13 牛ノ谷逢坂山		「1840±80」(大木)
9	金津町牛ノ谷	10027 牛ノ谷古墳	14 牛ノ谷締切谷		10027の範囲内
10	金津町柿原	10044 柿原中抉窯跡	6 柿原中抉窯跡		
11-1	金津町柿原			2 柿原1号遺跡	「炉1 遺構1」(福考)、大平山(関)
11-2				9 柿原2号	「炉1 遺構1」(福考)、岸場山Ⅲ(関)
11-3				3 柿原2号遺跡	「鉱滓出土地」(福考)、皿山(関)
11-4				10 柿原3号	「鉱滓出土地」(福考)、岸場山I(関)
12	金津町指中・柿原・青ノ木・滝	10031 細呂木窯跡	15 指中古ケ巣	6 細呂木遺跡1号地点	「製鉄炉1 炉3」(福考)、「1400±210」(大木)99・00町調査(炉1追加)
			16 指中飛山		福井鉄螺旋(窯3)
			17 滝鴻ノ巣	6 細呂木遺跡2号地点	「炉3」(福考)、長尾山Ⅱ(関)「1730±100～2410±90」(大木)
			18 滝鴻ノ巣		95町調査(堅炉1 箱炉1)、鴻ノ巣(関)
13	金津町滝	10032 滝西谷窯跡	19 滝上西谷		米ケ谷(関)
14	金津町滝	10033 滝大蟹遺跡	20 滝大蟹	7 滝遺跡	「遺構2」(福考)、大稻場(関)
15	金津町滝	10034 滝下中尾遺跡	21 滝下中尾		大滝(関)
16	金津町青ノ木	10035 木寅遺跡	22 青ノ木木寅		中木寅I・II、口木寅(関)
17	金津町青ノ木	10038 青ノ木堂ヶ谷遺跡	24 青ノ木堂ヶ谷		
18	金津町青ノ木	10039 青ノ木合毛谷遺跡	25 青ノ木毛谷	1 青ノ木遺跡	「遺構2」(福考)
19	金津町高塚	10057 高塚遺跡			高塚遺跡(工藤)
20	金津町宮谷	10042 宮谷遺跡	27 宮谷	8 宮谷遺跡	「鉱滓出土地」(福考)
21	金津町宮谷	10041 宮谷鳴田窯跡	26 宮谷鳴田窯跡		
22-1	金津町山室		31 山室寺ヶ谷		山室(関)
22-2			30 山室飛地山		
23	金津町山室	10071 菅野式枚田遺跡	32 山室衣掛山		10071に近接
24	金津町笹岡	10112 笹岡上角目遺跡	28 熊坂椎ノ堂		字地番不詳 熊坂(関)
25	金津町笹岡	10114 向山遺跡	29 笹岡向山		91町調査(堅炉1 箱炉1)

引用／遺跡発掘事前総合調査 金津町教育委員会 平成13(2001)年

見てふれる遺跡、今はなき遺跡たち。
そのどれもが、私たちとともに生き続けています。

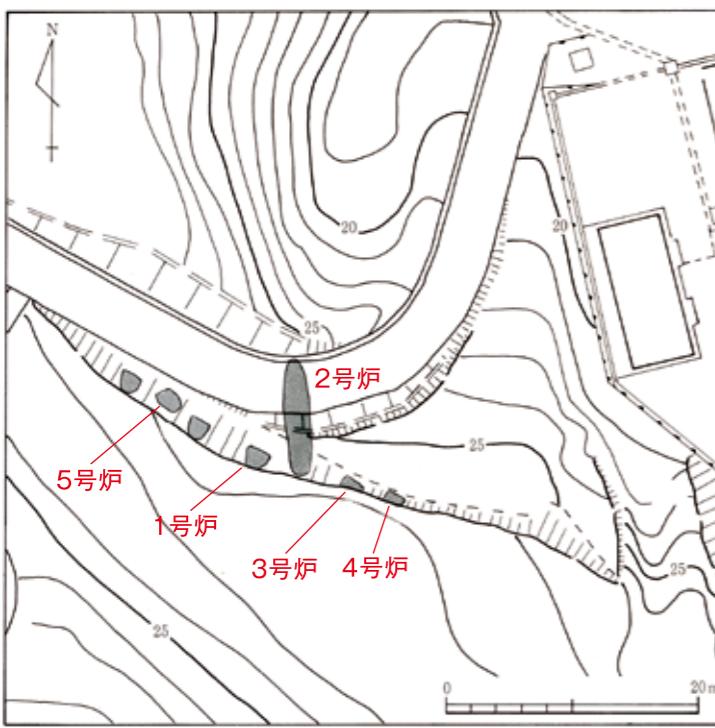
あわら市内の主なたら製鉄遺跡の紹介

前ページの製鉄遺跡のうち福井考古学研究会が昭和46(1971)年3月30日までに確認した10ヶ所の遺跡及び開発行為等により発掘調査が実施された遺跡について説明します。

細呂木遺跡1号地点【あわら市指中古ケ巣】

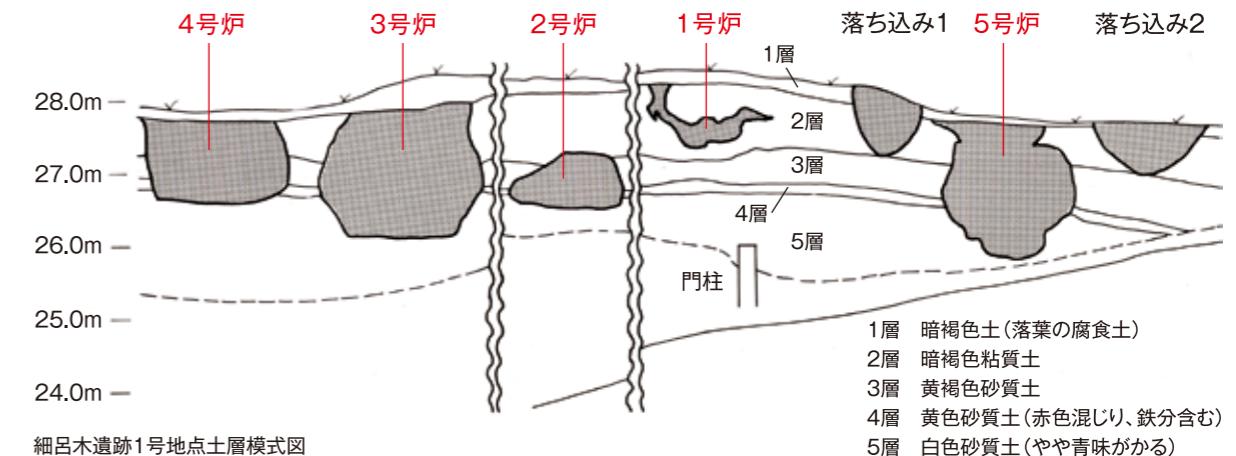
昭和45(1970)年、福井考古学研究会によるフィールド調査により、旧細呂木小学校の西側丘陵地に造成された農道の、南北両切断面に6ヶ所の窯状遺構を確認。農道を挟んで並列する西側4ヶ所の遺構はそれぞれ対応する位置にあり、炉数は2基と考えられるので、西側から1号炉、2号炉とし、他の2ヶ所の遺構は南側切斷面にのみ認められることから、これらの炉を3号炉、4号炉としました。

平成10(1998)年には、その後の開発行為に備え現状を把握するための確認調査を実施。この調査では、南側切断面の1号炉の西側に未知の遺構が確認され、これを5号炉としました。北側切断面にかつて確認された南側の遺構と対応する遺構は確認できず、この調査により新たに確認された5号炉は、その後の新規管理道路の敷設により消失。



細呂木遺跡1号地点 全景 昭和61(1986)年
柿原へ通じる農道 元細呂木小学校裏

細呂木遺跡1号地点遺構位置図



4号炉

地表下約0.15mに、炉幅約1.97m、炉高約1.14mの規模で、方形を呈している。遺構壁部はほとんど崩落し、互層に堆積している。



3号炉

地表下約0.4mに、最大炉幅約2.27m、炉高約1.92mの規模で、不整な台形を呈している。底面は砂質土上部に灰層が堆積し、壁部が焼結しているものの上半は崩落している。



2号炉

地表下約1mに、炉幅約1.6m、炉高約0.8mの規模で、ゆがんだ半円形を呈している。底面は焼結しており、その上部に灰層が2枚堆積している。形状から焚口付近と想定され、遺構の大半が欠損している可能性が高い。



1号炉

地表から浅い位置にあり地山まである2号炉から5号炉と対照的である。規模は、炉幅約1.8m、炉高約0.85mで、その形状から遺構の使用目的が異なる可能性が高い。明確な壁の焼結箇所を持たず、西側壁面の立ち上がりも識別できない。



5号炉

地表下約0.1mに約0.35m陥没して、最大炉幅約1.84m、炉高約1.35mの規模で、橢円形を呈している。底面は約0.2m掘り込まれ砂質土上部の底面や壁部は焼結しているが、その上半は崩落している。管理道路建設に伴う平成11(1999)年の発掘調査では、時期差のある2つの遺構が重なり合っていることが判明し、切削面は後から築かれた窯と確認されたが現在は消失。

参考／福井県金津地方の製鉄跡群 福井考古学研究会 昭和46(1971)年
遺跡発掘事前総合調査 金津町教育委員会 平成13(2001)年

整備された細呂木製鉄遺跡ミニパークは、 1~4号炉まで安全に見学していただけます。

細呂木遺跡1号地点は、平成30(2018)年1月12日に「細呂木製鉄遺跡」という名称であわら市指定文化財(史跡)に指定され、市の補助事業として保存工事が実施されました。工事の内容は、崖の崩壊を防ぐ遺跡下部の土盛り工事及び風雨から遺跡を守る上屋の建設工事です。また保存工事とは別に、ボランティアによる遺跡手前の広場の整地や排水路の敷設を行いました。さらに、かつて地元で盛んに生産された瓦にちなんで広場に瓦チップを敷詰め、ハナミズキを植栽。そこに、近隣で実際に発掘された豊型製鉄炉の原寸大のレプリカや古代の製鉄実習に使用する実習説明看板を設置しました。



遺跡公園全景



豊型炉レプリカ



細呂木小学校児童の実習風景

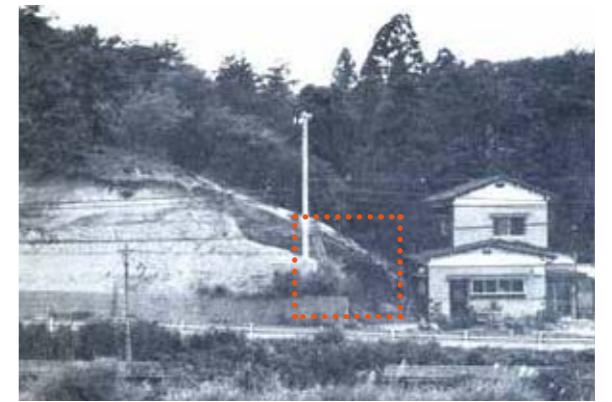


実習説明看板

細呂木遺跡2号地点【あわら市滝鴻ノ巣】

細呂木駅から南に約200mの地点、長尾山宅地付近の北側切削面に2基の窯状遺構が確認されました。西側の遺構を1号炉、道路近くを2号炉、そこから約100m南の丘陵断面の同形状遺構に確認された1基を3号炉としました。宅地付近の2基の遺構については昭和46(1971)年8月、その後の開発行為のため発掘調査が行われました。

炉は丘陵の傾斜地に沿って穴を掘り、それに煙出しを付設したきわめて特異な構造で、遺構の内部にはいずれも木炭を中心としたいくつかの層が見られました。この遺構から推察される操業方法は、点火後の原料や燃料の追加が構造上困難なため、入口部あたりに原料と燃料を挿入後、点火するという極めて簡単な手法であったと思われます。また、送風については自然送風もしくは、たたらなどの装置によるものか、入口部分が破損しているため手がかりは得られませんでした。



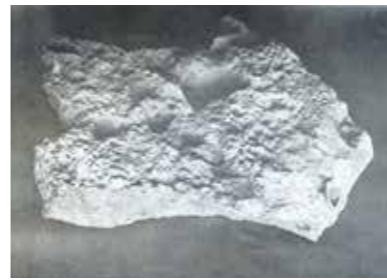
細呂木遺跡2号地点 全景 昭和46(1971)年撮影



1号炉
炉幅約1.7m、炉高は明確でなく地表面より下方0.8mのところから炉壁が現宅地まで2.8mの長さで延びている。南側奥壁は黒褐色に層状になっており、それは炉床面のカーボン層で複数の操業回数及び補修状況を表す。



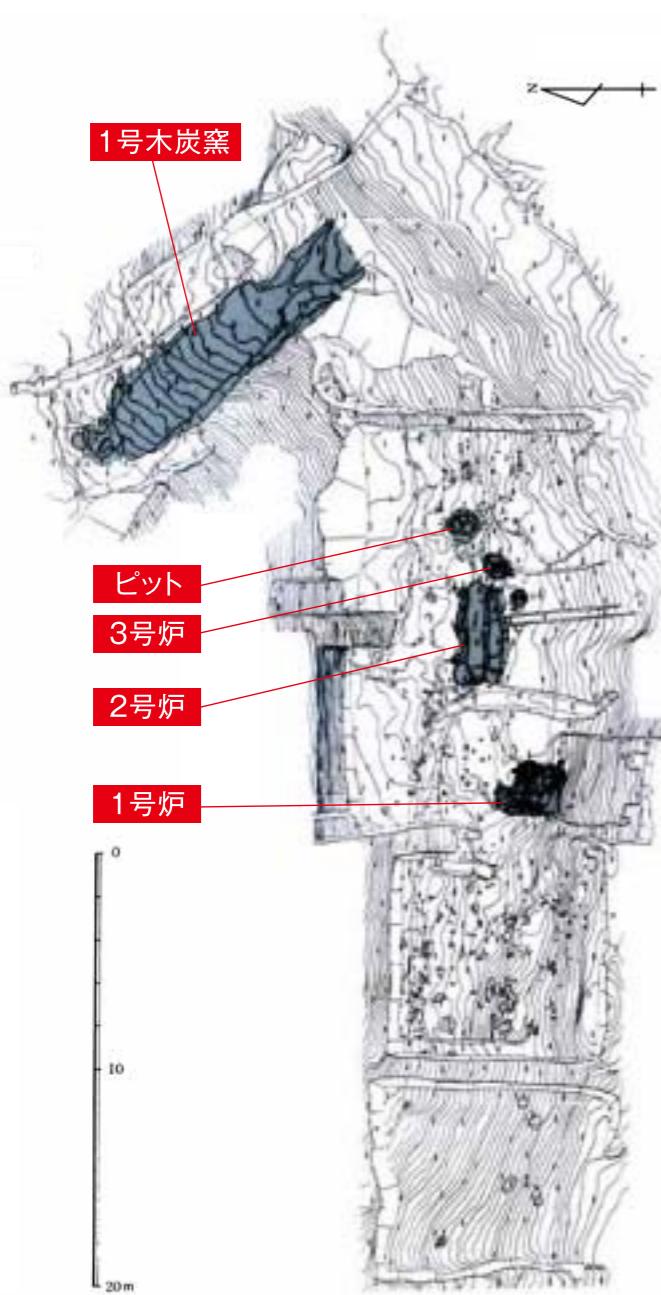
2号炉
炉幅約2.2m、深さ約2.9m、地表面より下方1.8mのところから炉壁が観察される。炉床面は奥壁に向かってやや傾斜しており、奥壁部には地山まで掘り込まれた小pitが認められる。天井部分は残存していないが側壁の角度からかまぼこ型と考えられる。



出土鉱滓
1号炉第5次操業面の煙道入口部に補修用として使用されたと考えられる。長さ約40cm、厚さ約5cm。

向山遺跡【あわら市笛岡向山】

あわら市笛岡地区のゴルフ場開発予定地に多数の鉱滓散布箇所が発見されていたため、平成3(1991)年、開発による消失前に発掘調査を実施。3基の製鉄炉遺跡と2基の木炭窯跡が確認されました。



1号炉

炉の形状は豊型で炉底は長方形を呈し、現存部分の長さ約0.7m、幅約0.55~0.59m。炉床面の入口部はわずかに傾斜し、前面に緩やかな凹部が存在する。炉の周囲には幅約0.45m、深さ約0.69mの溝が見られ、排水設備に使用されたと推測される。



2号炉

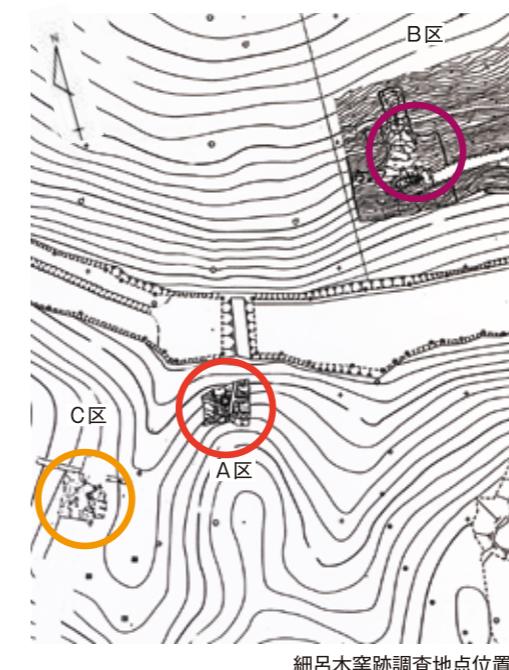
1号炉より北東に約3.5mの位置で、形状は箱型、炉床部の長さ約2.15m、幅約0.39~0.47m。炉の東端にかき出し口があった。出土した炉壁片の中に送風管の一部もあり、外壁部で約0.34m~0.37mの径があり、内面は壁面の熱変性により閉塞気味で三連以上を確認することができた。



3号炉

2号炉東端のかき出し部に隣接して、炉周辺の地山は約0.1~0.2m切り出され、平面形は約0.65×0.45mの楕円形を呈する。その内面約0.51×0.39mは赤化ないし硬化しており、南側に傾斜する地山面が約0.14~0.2m掘られ、すり鉢状の内径をみせる。

細呂木窯跡【細呂木小学校移転用地】



現細呂木小学校付近

細呂木小学校の新築移転先に鉱滓散布地が含まれていたため、工事による消失前に平成7(1995)年、事前調査が実施されました。北斜面の青ノ本地係(A区)では、豊型炉1基を確認。滝地係(B区)の南斜面からは上部に2基の炭窯、中段からは穴窯状の遺構、その下位からは方形の掘りかたが確認され、箱型炉の基部と想定されました。また、西側柿原地係(C区)では、灰層が確認されたため周囲を精査。しかしながら被熱硬化面を確認したのみで構造は明らかにできませんでした。



箱型炉

穴窯状遺構下位から確認された方形の掘り方は、約3.76×1.64mで、周辺の鉄滓の散布も両端排出の様相を示していることから、箱型製鉄炉の基部と想定された。



豊型炉

炉形態及びその周囲にコの字の溝を巡らせた構造は、笛岡向山製鉄遺跡1号炉に類似する。溝中から底部に糸切り痕を有する土師質土器が出土した。

地にねむる遺跡への思いがつのる。その数に、
あらためて金津という名のいわれを想う。

その他のたら製鉄遺跡

■青ノ木遺跡

北陸本線に平行して走る旧北陸道の青ノ木地係丘陵切断面で細呂木駅から南に約2,000mの地点。

1号遺構は、道路面から斜面上方約4.4mの所に、幅約3m、高さ約0.4mの黒褐色土のレンズ状遺構として認められます。この遺構から落下したとみられる鉱滓、炉壁、木炭などの製鉄関連遺物が道路端に確認されました。

2号遺構は発見当時、1号遺構の北約20m地点の切断面砂層中に、1号遺構と類似した形状で認められましたが、土砂採取のため消失しました。



■柿原1号遺跡

細呂木駅から西に約1,400mの柿原区に通じる農道の南側丘陵断面の地点。

1号炉は、黒褐色土の南端部から北方向に約4.2mの幅で、現地表面から下に約1.3mの厚さを持つ木炭を多く含んだ層が続きます。さらにその地点より幅約1.6m、深さ約1.3mの窯状遺構として確認されます。壁面は土が焼結し赤褐色を呈しています。



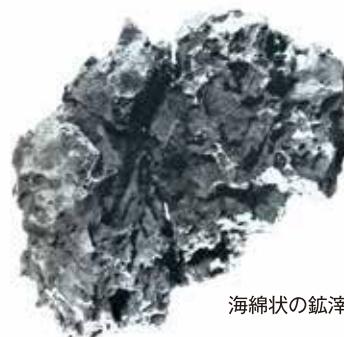
青ノ木遺跡1号炉



鉱滓

遺構の上部地表上には幅約3m、半径約4.3mの扇形状フラット面が観察されます。

2号遺構は、1号炉より北方向約1.9mの位置に、幅約3.5m、深さ約1.4mの窯状遺構として確認。この遺構に明確な炉壁は観察されず、炉底や側壁部に小石及び須恵器片が規則的に配列され、遺構中及び道路端には、海綿状の鉱滓や多量の須恵器片が見られます。須恵器片のなかには、鉱滓が付着しているものもあり、青ノ木1号遺構と外観の類似した炉壁も多く見られます。遺構上部丘陵裾部には幅約5m、半径約5.9mの扇形状のフラット面が造成され、扇頂部付近から傾斜角度約5°で長さ約4.9m、幅約2mの落ち込みが存在し、須恵器登り窯の形状を思わせます。



海綿状の鉱滓



須恵器片付着鉱滓

■柿原2号遺跡

1号炉は、柿原1号遺跡より西に約500mにある農道を北に約300m入った地点。

丘陵東側切断面に炉の一部が露呈しており、地表面約0.4mのところから下方に延び、炉幅約1.5m、高さ約1.6m。炉底部の形状は、道路盛土のため明らかではありません。現地表面には、丘陵斜面上方に向かって約10m（傾斜角度約10°）の長さで落ち込みが観察されますが、切断面に垂直ではなく、やや北に偏しています。遺構の切断面には若干の鉱滓が露呈しています。

2号遺構は、1号炉の北約100mの地点。

道路面の上方約3mの丘陵切断面にあり、幅約5m、厚さ約0.5mの灰原状の遺構で、地表面には遺構の真上あたりに幅約8.5m、長さ約7mのほぼ梯形状をしたフラット面が確認されます。この遺構内から少量の鉱滓と須恵器片が採取されました。

■柿原3号遺跡－鉱滓出土地－

柿原2号遺跡を北方向に4つ目の小谷を農道より約300m入った地点。

丘陵南側傾斜面に外形上登り窯跡に類似した地形が數ヶ所見られ、付近の農道上や水田、溝中に鉱滓が大量に見られました。谷を挟んだ反対側傾斜面にも同様な地形が存在し、水田中にも鉱滓が認められます。鉱滓は気泡痕の多い海綿状のものが大部分で、須恵器片は確認されていません。

■柿原4号遺跡－鉱滓出土地－

柿原1号遺跡の西方約600mの柿原集落より北に走る農道を約200m入った地点。丘陵西側切削面に幅約50mにわたって鉱滓の堆積が見られます。付近の丘陵傾斜面にはところどころに溝状の落ち込みが見られ、裾部はやや平坦になっています。農道を挟んで西側には沼地があり、こちらにも鉱滓が散在。出土鉱滓は木炭を含むものが多く、須恵器片が付着しているものもあります。

■滝遺跡

1号遺構は、細呂木駅から南に約1,000mの青ノ木集落北端にある滝集落に至る農道を約500m入った地点。

山裾の東側切削面に露呈する鉱滓などの製鉄関連遺物は、農道上や溝中にも見られます。斜面(傾斜角度約30°)をカットして登り窯の灰原部に似た梯形状の平坦部を造成。焚口に相当する部分より上方に斜面に沿って長さ約10.5mの若干の落ち込みが観察されます。平坦部の幅は約9m、切削面から斜面までは約4m、鉱滓の堆積層の厚さは約1.3mです。



滝遺跡1号遺構

2号遺構は、1号遺構の北に約20m離れた同じ丘陵の裾部の地点。

形状は1号遺構に類似しており、平坦部の幅は約13.8m、切削面から斜面までの長さが約6.2m。農道上には若干の鉱滓が見られましたが、切削面には確認できませんでした。1号遺構に比べて平坦部の定形が明確ではありません。

■宮谷遺跡－鉱滓出土地－

宮谷集落の東端より南から東へ走る農道の約200m進んだ地点。

道路端に鉱滓が見られ、丘陵南側斜面に幅約11.5m、奥行き約3mのフラット部を確認。そこから上方に高さ約4mの斜面が続き、幅約13m、奥行き約5mの方形状平坦部が造成されています。さらに上方にも幅約20m、奥行き約5mのフラット部分があり、いわば階段状の遺構となっています。この遺構は滝遺跡の地形と極めて類似した外観を持っています。

■沢遺跡

旧北陸道より沢集落を経て北に向かう山道を約1,700m入った石川県境付近。

丘陵裾部の南側切削面に多量の鉱滓が露呈しています。斜面をカットして造成されたとみられる幅約6m、奥行き約4mの平坦部があり、斜面上に長さ約5~6mの溝状遺構が確認できます。付近には数基の炭窯も存在しており、出土した鉱滓は、炉温上昇後のよく溶けた鉱滓の出土が多く、細呂木1号地点2号炉の鉱滓に似ています。

■牛ノ谷遺跡－鉱滓出土地－

牛ノ谷駅から西約50mにある鉄道と平行して走っている農道地点。

道路上や丘陵裾部に、鉱滓、炉壁など製鉄関連遺物が3ヵ所にわたって見られます。いずれも斜面裾部をフラットに整地していますが、他と比べて外表上の変化は顕著ではありません。

参考／福井県金津地方の製鉄跡群 福井考古学研究会 昭和46(1971)年

(注)その他のたら製鉄遺跡は、参考文献の表現をそのまま使用しており、現在の状況を表わすものではありません。

火と水と大地、そして人の力。 奇跡のような出会いの中で、鉄が生まれました。

たら製鉄の操業

たら製鉄は「砂鉄七里に、炭三里」といわれるよう、操業には良質の砂鉄と大量の木炭の確保が必須といわれます。木炭の原料となる材木は、炭焼き小屋まで約12kmの範囲でないと採算が取れないという意味のようです。島根県和鋼博物館の資料によると、たら製鉄1回に砂鉄8t、木炭13tを投入してできたケラは2.5tで、そこから玉鋼が1t取れたそうです。また、操業には三昼夜70時間もかかったとあります。

砂鉄の話

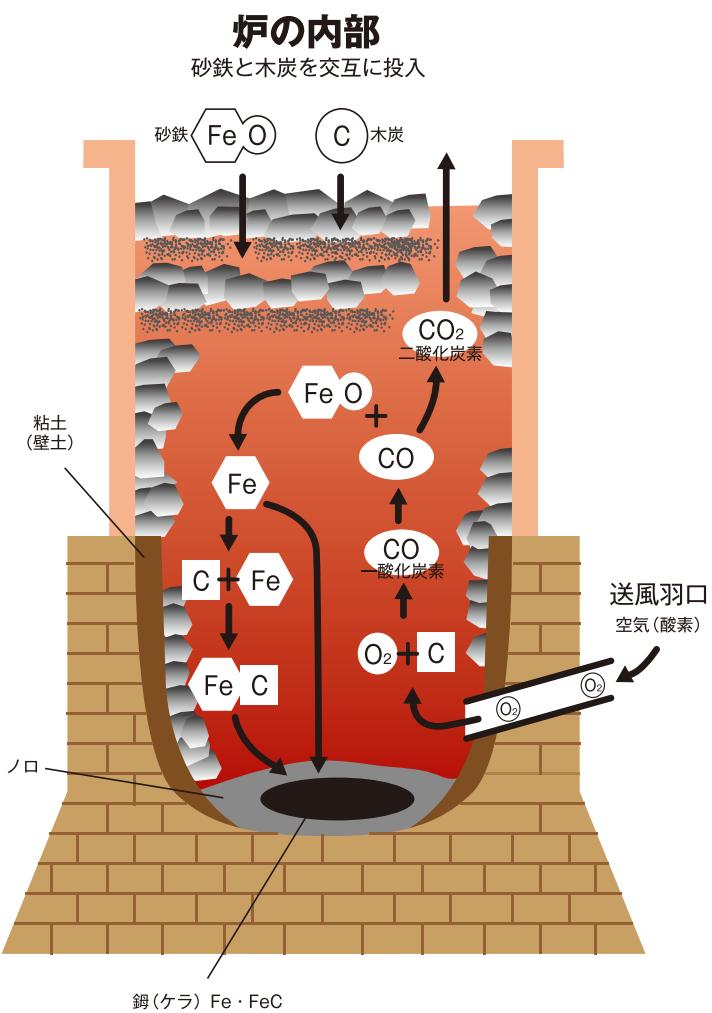
砂鉄は分類すると、真砂(マサ)砂鉄と赤目(アコメ)砂鉄になります。細呂木地区に点在する製鉄遺跡で使用された砂鉄は、二酸化チタン(TiO_2)などが含まれている赤目砂鉄といわれます。出雲地方のように花崗岩の山を崩し直接採取した砂鉄ではなく、異なる母岩から流出した砂鉄が混じりあっていると思われます。

木炭の役割

たら製鉄の操業に、木炭は還元剤として重要な役割をします。木炭の原料は、マツ、クリ、マキ、ブナ等が良いといわれ、山から炭窯の所まで運び出し炭造りを行いました。当時では大変な労力だったことが推察されます。島根県和鋼博物館の資料によると、1基あたり1回の操業に木炭13t、森林面積にして1ha分の膨大な木材が必要だと推定しています。さらに材木を切り出した山が、元の姿に戻るには30年はかかるともいわれています。

たら製鉄操業の様子

①砂鉄:酸化第一鉄(FeO)を投入する前に、木炭:炭素(C)を燃焼させ炉内の温度を上げておきます。木炭は、燃焼時に送風羽口から送り込まれた酸素(O₂)と結びつき一酸化炭素(CO)を発生します。



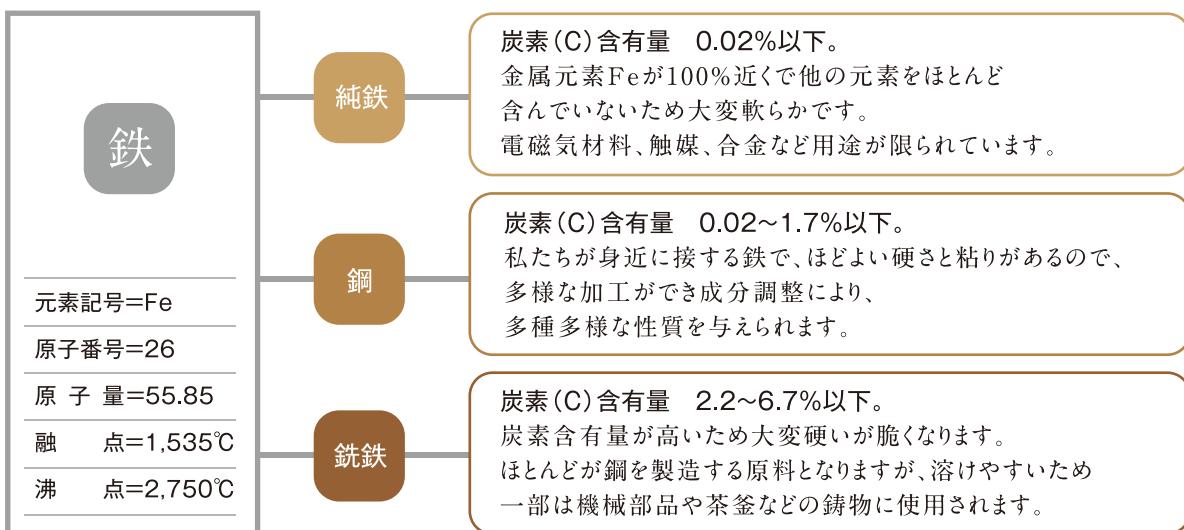
②炉内の温度が充分に上がったら、上部より砂鉄と木炭を交互に投入します。投入された砂鉄は、炉内を上昇してきた一酸化炭素と熱により反応し、砂鉄に含まれる酸素が一酸化炭素と結合して二酸化炭素(CO_2)となって排出されます。上部から投入された砂鉄は、酸素を抜かれながら炉内を降下します。砂鉄に含まれる不純物は融点が低いため先に溶けて底にたまります(ノロ)。降下した砂鉄の一部は炭素と結びつき、純粋な鉄(ケラ/ $Fe \cdot FeC$)となってノロの中に沈みます。

③砂鉄と木炭の投入を続けながら、時々ノロを派出しケラが大きく育つのを待ちます。

④ケラが大きくなった頃に、送風を止め、炉を破壊してケラを取り出します。

鉄の紹介

鉄は元素記号「Fe」、原子番号「26」の金属元素です。また、鉄は製錬後に含まれる「炭素」量により硬さが異なり、純鉄、鋼、銑鉄と呼ばれます。



たら製鉄と福井平野

あわら市細呂木地区でのたら製鉄操業時代、砂鉄や木材の運搬、そして製品などの搬出はどのようなルートで運ばれたのか。縄文時代(約5,000年前)には福井平野に海が入り込み、海水面が現在より約5m高かったといわれています。その後古墳時代から奈良時代には、三里浜らしきものができ後背地は泥沼となりました。その後三国港が開かれ、福井平野は豊かな土地になったといわれています。伝承では、6世紀初め、繼体天皇がまだ「男大迹王(おおとのおう)」と呼ばれ、当時の越前で生活されていた頃、福井平野を三国町あたりで開削し、肥沃な土地にされましたとあります。後背湿地と谷底平野のなかでも、とりわけ低い窪地は水運として使われたと推察されます。こうした水路らしい窪地は、細呂木地区でのたら製鉄操業に、砂鉄や木材の運搬、また鉄製品などの搬出にも使われたと考えられています。

編集後記

このたび、「あわら市たたら製鉄遺跡の案内」が発刊できたことは喜びにたえません。たたら製鉄遺跡が細呂木地区で最初に確認されたのは、指中59字古ヶ巣の6ヵ所の遺構でした。これが製鉄遺跡として、あわら市の指定文化財（史跡）に指定され、保存、整備されました。現在は遺跡ミニパークとして一般に公開されています。この場所は細呂木小学校への柿原区からの通学路で、遺構として発見されるまでは通学時の子どもたちや地域の人たちが、「おや、なんだろう？」と不思議に思いながら通っていたことが思い出されます。これが、たたら製鉄遺跡だったのです。その後、昭和46年3月頃までに福井考古学研究会のフィールド調査により、この遺跡を含め合計10ヵ所の遺跡が確認されました。

地域の人たちのちょっとした疑問が、このすばらしい発見につながったのだと思います。些細な疑問であっても興味を持って究明していこうとする気持ちが、研究には大切だということに改めて感じさせられました。

本書では、これまでに確認された製鉄関連遺跡の中から、発掘や調査等で正式に報告書が作成された遺跡を抽出して紹介しています。これまで細呂木地区とその周辺で行われた調査、発掘の概要がすべて網羅されていますので、製鉄遺跡の実態を知るうえで参考としていただけるのではないかと思います。

私たちのふるさと「金津」の名称の由来は「鉄を積み出す川港」だと言われています。古代の人々が、たたら製鉄での鉄づくり、そして製品の搬出に大変な労力をかけていたことが偲ばれます。これら製鉄産業の遺跡は、祖先が残した地域の貴重な遺産です。私たちはこの遺産を大切に保存し、後世に伝えていきたいと思います。

たたら製鉄遺跡保存会
顧問 坂本 浩太郎

参考文献

- ・福井県金津地方の製鉄趾群 第1次フィールド調査 福井考古学研究会 昭和46(1971)年
- ・細呂木遺跡 2号地点1,2号製鉄炉発掘調査報告 一図録編一 福井県教育委員会 昭和47(1972)年
- ・金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度 金津町教育委員会 平成7(1995)年
- ・第11回発掘調査報告会資料 福井県埋蔵文化調査センター 平成8(1996)年
- ・古代の製鉄遺跡 金津・芦原町と加賀地方 加越たたら研究会 平成11(1999)年
- ・金津町埋蔵文化財調査報告 第2集 遺跡発掘事前総合調査 福井県金津町教育委員会 平成13(2001)年

たら製鉄遺跡保存会

事務局／福井県あわら市滝63-21(細呂木公民館内)

TEL.0776-73-2151

E-mail:komin-hosorogi@city.awara.lg.jp

令和2年2月22日発行